

# 金色の砂

夢見永遠

小学生の頃、大好きだったお爺ちゃんが亡くなった。中学が上がった頃、親友の市子が、いじめられて引越した。

高校で、一年も付き合った彼氏にフラれた。それなのに……。

私は未だ、涙を知らない。

悲しいとき、辛いとき、苦しいとき、喉が詰まるような息苦しさに苛まれた。吐きそうなほどの胸の痛みを押し殺したのは、一度や二度じゃない。涙だけが流れない。その代わり、光り輝く星屑がこぼれ落ちる。私の右手を、指先を伝って、流れていく。葬儀の席、お別れ会、思い出の場所。どこでもそうだ。思い出すたび、輝き落ちていく金色の粉。それは私以外、誰にも見えてはいないらしい。

「強いわね」

棺を抱きながら、母は嗚咽をもらした。

「冷たいね」

別れ際に市子は唇をふるわせた。

「タフだね」

友達には呆れられた。

その度に私は右手を握りしめた。あふれないように、漏れださないように。けれど、指の間からすりぬけた砂粒は、床に小山を作っていく。誰にも見えていないことが唯一の救いで、一番の苦しみだった。

相変わらずこの体質は治らないまま。気がつけば社会人の一歩手前。「大学生は暇でいい」という嘘八百を呪

いながら、それでも楽しく毎日を過ごしている。朝は五時に起きて、夜は十二時過ぎに寝る。今日もそうだった。ようやく家についたと思ったら、時計の針が十二時を回っていた。どうしようもなく眠い。立ち止まった瞬間に、まぶたが落ちてしまいそうだ。肩が痛い。鞆が食い込んでいる。寒い。コート一枚じゃたりない。

ポストの手紙を無造作につかみ取り、玄関を開けた。瞬間、ふわりとしたぬくもりが頬に、首に、指先に触れた。ようやく息をつき、靴を脱ぎ捨て自分の部屋を開けた。ようやく息をつき、靴を脱ぎ捨て自分の部屋を開けた。放つ。上着は回転椅子に投げ出して、ひとまずベッドに倒れ込む。倒れ込みついでに、手紙を広げる。料金の請求書が一枚と広告が二枚、封筒が一つ。最後の一つは元カレからだ。良い気はしなかったけれど、念のため封を切ってみる。くだらない内容だったら資源ゴミにだそう。便せんが三枚入っていた。角張った字体がズバリと並んでいる。

彼は随分古風な人だった。電子機器は最低限のガラケーとパソコンだけで、大抵の用は手紙で済ましている。そんな、時代から一歩離れたところにいる人だ。

卒業式の後。図書館にて。何をしてもなく、私たちは一緒にいた。あの人は本を、私は携帯を。目を合わせることすらせず、ただ時間だけを共有した「気」になっていた。

「会えなくなるね」

おもむろに私が呟くと、答えるように軽い音。相手が本を閉じたのだとわかるのに、少し時間がかかった。不自然なほど大きな音だったから。

「別れよう」

唐突に告げられた。その前後に何があったわけじゃな

い。突然のことだ。「なんで」とか「やだ」とか、そうやって声を荒げるべきだったのだろうか。

「そっか」

なんのひっかかりもなく、答えた。冷たい画面と指先の間から、例の星屑が、じわじわと滲みだしていた。どれだけ時間が経っても、あの感覚が記憶からはがれることはなかった。

しかし、手紙の内容は近況報告ばかりだった。授業がどうだとか、サークルがなんだとか、一人暮らしがうんたらかんたら。これはゴミ箱直行だろう。最後の便せんもそうだ。なんということはない。最後の最後まで淡々とした文で終わっている。最後に申し訳程度に一言こうある。

「無理、すんなよ」

口ずさむ。面白くもない。ありきたりで、月並みだ。

だけど爪を握り込む。ああ、やっぱり。止まらない。止まらない。どんなにしても、とまらない。粒がこすれて、小さくうめいている。観念して手を開くと、フローリングの床にパラパラと雨粒よろしく落ちていく。

掃除するのが面倒くさい。ごまかしまじりに、あくびを一つ吐き出して、乾いた目尻を指でなでた。手紙はゴミ箱につっこんで、ふたをした。こぼれた砂も、いっしょに捨てた。

つまらない内容だ。何か面白いことがあるわけじゃない。残ったのは、なんとなく悲しく、なんとなく寂しい、海底にうずくまるような感覚。藍色のわだかまりを温めて、かきわけて、ようやく届く光。私が握っているのは、きつとそういうものだったのだろうか、と思う。(終)